世界ガールズ・レポート 2023

日本版報告書

2023 年 10 月

公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン

この国別報告書は、「世界ガールズ・レポート（SOTWG）2023」のために、プラン・インターナショナルが行ったアクティビストへのインタビューから得られた主な調査結果を国別に紹介するものである。世界的な分析と調査方法詳細については、テクニカル・レポートを参照のこと。

本ファクトシートに関するお問い合わせ先：
isobel.fergus@plan-international.org
aisling.corr@plan-international.org
martha.guevara@plan-international.org

目次

ファクトシート情報の見方と使い方 2
回答者の概要 3
取り組んでいる社会課題 4
課題に関する情報源 6
課題に対する政府の対応への認識 7
活動のタイプとレベル 8
活動がもたらした影響への認識 10
活動を支援する資金 11
活動への障壁 13
持続可能な開発目標（SDGs） 15
未来の活動 17
求められる支援 18
提言 19
行動への呼びかけ 20

ファクトシート情報の見方と使い方

構成と内容

このファクトシートは、「世界ガールズ・レポート 2023」グローバル・テクニカル・レポートの主要なセクションに関する重要な情報と結果を抽出したものである。

限界とデータの解釈方法を理解する

グローバル・レポート内のデータ分析とそこから導き出される結論、そして個々の国レベルのデータ分析の両方には限界がある。以下、考慮すべき最も重要な注意点をまとめる

持続可能な開発目標（SDGs）

女の子とユース女性への SDGs に関する質問に入る前に、以下の情報が回答者に共有された。

> *SDGs は、貧困をなくし、地球を守り、あらゆる場所のすべての人の生活と将来性を向上させるための普遍的な行動を呼びかけるものである。この 17 の目標は、目標を達成するための 15 年計画を定めた「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」の一部として、2015 年にすべての国連加盟国によって採択された。気候変動への対応や飢餓の撲滅など、持続可能な開発のための 17 の目標を提案している。これらの目標は、国連加盟国政府、NGO、草の根からの意見徴収、ユースなど、さまざまな集団の協力によって策定された。目標はその性質上普遍的なものである。つまり、すべての国連加盟国がこれらの目標の達成に取り組んでいることを意味する。目標のひとつは、ジェンダー平等を目指している。*

ピア・ツー・ピアのインタビュー方式による潜在的なバイアス

限界 1：

本調査に参加した共同調査者は、調査対象となった女の子やユース女性と同世代から選出された。調査に参加したユースは、既存のネットワークなどを利用して、他の女性アクティビスト（活動家）たちに調査への参加を打診するなど、彼女たち自身の経験を生かしてもらうことができた。加えて、参加者は共同調査者が知り合いだったりするなどの理由から、より正直かつオープンに答えている可能性がある。 一方で、参加者のなかには、共同調査者とそりが合わずに協力を辞退したアクティビストもいた可能性もある。さらに、共同調査者が自身の人脈から活動家にインタビューすることや、トピックに精通していることから、先入観がある可能性もある。

限界 2：

共同調査者は、プラン・インターナショナルの各国オフィスのネットワークやパートナーから募集したため、プランの活動の中心的な問題やトピックに関心があるという偏りがあった。

限界 3：

共同調査者やインタビュー対象者のほとんどは、インタビューに応じるために、インターネットへのアクセスや電話へのアクセスを必要としていた。対面インタビューを実施した国もあるが、女の子やユース女性の大半は、インターネットや電話接続が可能な機器への十分なアクセスが必要であった。つまり、インターネットや電話への持続的なアクセスができない、弱い立場に置かれやすい女の子や女性は、自身の経験を分かち合うことができなかった。

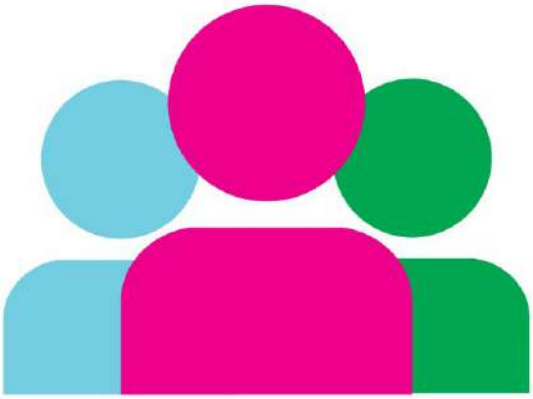
回答者の概要

共同調査者は全員 15～24 歳で、活動家であるか、キャンペーンや活動に関わっていることを自認している。彼女たちは、質的インタビューと倫理に関する研修を受けた。共同調査者たちは、同じく活動家やキャンペーン関係者、あるいは関連する活動を行っている仲間とともに、すべてのインタビューを行った。インタビューは半構造化形式で行われ、彼女たちが自分なりの促しや追加の質問を入れることができるようにした。インタビューの時間は様々だが、通常約 30 分～2 時間で、質問者と被質問者にとって最も都合の良い方法によって、Microsoft Teams、Zoom、WhatsApp、または関連するプランのオフィスでの対面式で行われた。

インタビューとフォーカス・グループ・ディスカッションの参加者全員が自身で仮名を選んだ。このファクトシート全体を通して、参加者は仮名、およびインタビューまたはフォーカス・グループ時の年齢で表記されている。

表1：共同調査者の氏名、参加者の仮名、年齢

共同調査者	参加者の仮名	年齢
プラン・ユースグループメンバー（吉村、石井）	Goma	23
	SPES	24
	R	22
	Nanami	22
	Lily	22



取り組んでいる社会課題

参加者のうち 3 人は、性と生殖に関する健康と権利（SRHR）の問題に積極的であった。SPES は、経口避妊薬に関する議論により、日本社会で性への関心が高まっていると感じてはいるが、全体的に、

「日本全体では性に関する知識が不足している」

と感じている。

Goma もまた、教育を受ける中で経験した個人的な体験から SRHR に取り組んでいる。Goma は現在、中学校や高校で性教育を教えており、ユースの視点を政府関係者と共有することを目指し、月経についてオープンに話すオンラインのイベントを開催している。

「私は個人的な人生経験から、特に SRHR に取り組んでいます。留学中に、妊娠・出産が原因で教員になる夢を諦めた女の子に出会いました。その姿を見て、妊娠・出産が女性の人生に大きな影響を与えることを実感しました」

Lily も、妊娠や家庭を持つことが女性のキャリアに与える影響ついて考えるうちに、ジェンダー平等に関心を持つようになった。イギリスでの留学経験もあり、日本とのジェンダー平等の違いを感じたという。

SPES と R もジェンダー平等について活動していた。SPES は、人間関係における平等と彼女が社会的にまだ十分に認知されていないと考えている親密なパートナーからの暴力に関する知識を共有したいと考えていた。彼女はキャンペーングループの広報を統括し、イベントや講演会の調整をする一方、職場での多様性の擁護者になることを目指している。

Nanami は自らを環境活動家だと考えており、彼女の活動は気候変動問題の解決に役立つもので、それは貧困解消やジェンダー平等と相互に関連していると考えている。彼女は、以前インドネシアのバリ島にある Green School の生徒で、その学校は環境教育に特化しており、「地球上で最も環境に優しい学校 」に選ばれている。彼女は、ほとんどの人が自身のようには環境問題について知らないことに気づき、日本中の学校で講義を行い、知識を共有することを決意した。

「自分が学んできたことを人に伝え、それが役に立つのであれば、とても幸せだ と思ったのです。これまで約 200 校、3 万人の生徒を対象に、小・中・高・大と講義をしてきたので、講義をすることは環境アクティビストとして認められることにつながると思います。私はそんな活動に取り組むことにしました」

Nanami はまた、ソーシャルメディアで啓発ビデオを 60 本ほど制作しており、こちらもメッセージを拡散するのに有効だと気付いた。

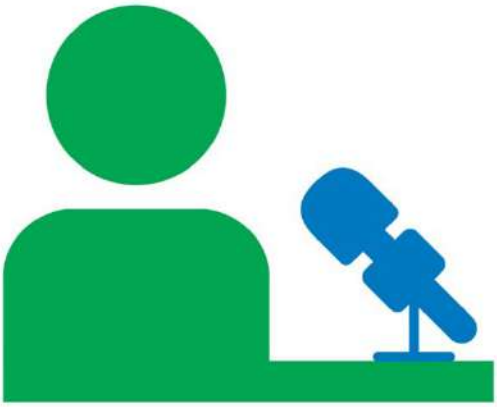
「メディアと対面式講義が果たせる役割は素晴らしい」

さらに Nanami は、彼女の姉妹が肌の問題を抱えていることに触発されて、環境に優しく動物実験を行わないエシカルコスメの開発に取り組んでいる。Lily（22 歳）も気候変動に関心があり、このテーマについて学びを深めることに興味を持っていた。

「気候変動について調べていくうちに、それはすべての人に影響を及ぼすこと、そしてその影響をより受けやすい脆弱な人々がいることに気づき、一層興味を持つようになりました」

Lily は、ユースの声を意思決定プロセスに反映させるよう提言書の起草に携わった。

「例えば、普段は活動やキャンペーンに参加しないユースたちが意見を交換できるよう、オンラインでユース会議を開催しています。そこで出された意見をもとに提言書を作成し、関係機関に持ち込んでいます。また、Global Climate や SDG シナジー会議など、国内外のイベントにも参加しています。
私たちの活動の主眼は、プラットフォームを作ることです。ユースの声を国際的、国家的な意思決定につなげるだけでなく、ジェンダー平等、貧困、原子力、環境など、さまざまなテーマを学際的につなげることを目指しています」



課題に関する情報源

日本の女の子や女性は、自身が熱中しているテーマについて、さまざまな方法で学んでいた。例えば、R は友人、大学の授業、本などを通して学んだ。Goma は、学校、助産学生による SRHR の講義、日本の NGO による SRHR のワークショップなど、正式な方法で学んだ。

Nanami は Green School で学ぶ機会を得て、知識を深めた。日本に戻った今、彼女は主に海外のメディアを頼りにしているという。というのも、ユーザーからの収益によって運営されている独立系のメディアが多いからだ。

「環境問題や気候変動について英語で調べると、日本語の 100 倍以上の情報が出てきます。燃えている熱帯雨林のこととか、友だちが住んでいるブラジルの状況とか。ブラジルや他の国の現状を知りたいので、英語で情報を探しています」

Lily も、学校教育を通じて気候変動について学んだ。また、国連気候変動枠組条約締約国会議（COP）や世界経済フォーラムのニュースを見るなど、国際的な情報源も活用していた。Nanami も気候変動に関する記事や論文を読むのが好きだったが、ソーシャルメディア上のユース団体の投稿が役に立つこともあると語った。

ジェンダー平等については、Lily は Women 7（W7）会議に参加して多くのことを学んだという [1]。また、国連の記事を見たり、ジェンダー問題に積極的なソーシャルメディアのアカウントをフォローしたりしている。SPES も、SNS で同じ関心を持つ人びととの交流が学びに役立つという意見に共感した。

[1] W7 は G7 サミットの公式エンゲージメントグループである。市民社会組織は、G7 プロセスの中でジェンダー平等と女性の権利に関する提言を各国政府 に推進するために集まっている。その目的は、G7 の指導者たちが、あらゆる場所の女の子と女性の生活に実質的かつ持続的で変革的な影響を与えるような具体的な政治的・財政的取り組みを採択するようにすることである。

課題に対する政府の対応への認識

インタビューに応じたアクティビストのほとんどは、自身が気にかけている問題に対して政府は何らかの措置を講じているが、十分ではないと感じていた。例えば、Nanami は、気候変動問題に関して政府はもっとできることがあると感じていた。また、Goma は、日本では SRHR 教育が欠如しており、政策決定者の関心が低いと感じていた。

「自分の体のプライベートゾーンについて学ぶ機会がもっとあっても良いと思います。私はある NGO で性教育に取り組んでいて、文部科学省に包括的性教育（CSE）の導入を政策提言したのですが、文部科学省は性教育の重要性をあまり理解していないと感じました」

Goma は、政治家との別の話し合いに参加したが、アクティビストは現行制度の欠点や政府が改善できる点を指摘する傾向があり、アクティビストと政治家の間に対立があるように感じたと続けた。彼女は、アクティビストが別の角度からこうした批判にアプローチできれば、対話はさらに進むと考えている。

「でも、それだと一方通行で話が進まない気がする。『一緒にいい政策を作っていこう』というマインドを持って、政治家にアプローチしていくことが大事だと感じました。だから、肯定的な姿勢で話をして、政治家に支援してもらうのはいい戦略だと思う。私たちは皆、同じコミュニティに住んでいるということを念頭に置くべきです」

R は、女の子やユース女性の声を意思決定の一部として取り入れることが、物事の進め方に関して現状に挑戦する鍵になると指摘した。

「時と場合によると思います。政府は世論に押されて経口避妊薬に積極的に取り組んでいます。しかし、意思決定の場に女性がいないことが問題だと思います。意思決定プロセス自体にジェンダー・バイアスがあるのです」

活動のタイプとレベル

日本のアクティビストの大半は、集団的な活動と個人的な活動の両方を行っていた。だが、彼女たちの多くが、個人的な活動を好み、個人的な活動のみを行いたいと考えているようであった。これは、集団的な活動を好む他の世界的なアクティビストたちとは対照的であった。Nanami は、主に個人として活動し、必要な時に必要なだけ他の人々と協力していた。彼女はほとんどの活動を一人で開始していた。

「いつもそばにいてくれる人はいません。
自立しているし、お金の面でも一人でやっています。
肉体的な面やコミュニケーションなども含めて、基本的にすべて自分でこなしています。今は英語のビデオを作っています。
取材の依頼も多いので、たくさんやらなきゃいけないんです」

しかし、Nanami の動画が知られるようになるにつれ、彼女はデザイナーやライター、広報といった人々と活動をするようになった。しかし、彼女は集団で活動をすることの難しさを感じていた。

「私はどこかに所属することが苦手です。
日本に帰ってきて、ある環境団体に入りました。その団体には良いところがたくさんあったのですが、お金のことなどで誰かの許可を得なければなりませんでした。本当はすぐにでもやりたかった。
それで、自分ひとりでやろうと決めて、活動を始めたんです」

Lily は、あるグループを通じて活動に参加し、この経験を通じて人脈を得たが、個人でやってみたいこともあるという。SPES も、ユースの投票率が低いという問題にグループで取り組んだ。

Nanami と同じように、R も最初はひとりで活動していたが、次第に他の人と一緒に活動するようになった。

「一人で活動をするときは、自分でテーマを考え、そのアイデアをソーシャルメディアに投稿して、同じように悩んでいる人がいないか確認することがほとんどです。また、ネットで検索したり、他のユーザーのつぶやきに触発されて、例えば、”SEO（検索エンジン最適化）セックスプロジェクト ”のように、自分も行動を起こすこともあります」

Nanami は、国レベルでの活動に重点を置いているが、自身の世代にリーチしたいため、意思決定者ではなく、学生を対象にしている。

「政治も重要だと思いますが、まだそこまで手が回っていません。
政治が変わるには時間がかかるし、その間に環境問題は悪化します。
ですから、目の前にいる学生や同世代の人たちに私の話を届けたいです」

R も性教育に関心のない同世代を取り込みたかった。Goma もまた、中学生や高校生といった学生を対象にしていた。彼女は性についての知識が少ない人たちを対象にしたかったのだ。しかし、ネット上では性教育に関心のある人たちが対象になりやすい。

Lily は、複数のレベルの意思決定者にユースの声を届けることで、高いレベルでの参加を目指すという目標を説明した。

「私たちのキャンペーンの対象は 29 歳未満のユースです。
そして私たちの目標は、政府、G7 諸国、経団連、国連など、
国際的にも国内的にも意思決定者にその声を届けることです」

活動がもたらした影響への認識

参加者は、自身の活動の効果についてはあまり確信が持てないものの、少なくとも何らかの変化は生み出していると考えていた。R は、性教育に関連した自身の活動に誇りを持っており、少なくとも何らかの変化をもたらしていると考えている。Lily（22 歳）は、フェミニズム活動を始めてまだ 1 年しか経っていないが、W7 に参加し、ジェンダー平等についてソーシャルメディアに投稿することは、人々の意識を高め、ユースの立場を向上させることに貢献していると考えていると述べた。

「変化が起きてきていると信じたいです。
変化はきっと起こると信じています」

Goma は、性教育と望まない妊娠に関連した自分の活動に対する反応は肯定的なものであり、それゆえ、ある程度の変化はあったと考えていると述べた。しかし、彼女は次のように指摘した。

「社会を変えたいと思うのは簡単だけど、その変化を測るのは難しいです」

Nanami は、まだ変化が起きていないと感じていた。もし変化が起きているのであれば、彼女の活動は必要なく、将来起こり得る変化の機会について議論される必要があろう。イベントで発言することで、次世代のユースたちに影響を与えることを期待していた。

「現状に満足していたら、活動をやめてしまうでしょう。
自分の活動に満足したことはないし、よくやったと思ったこともないです。どうすればもっと向上できるかを考えています」

R は、自分の行動の規模と重要性を実感した経験を語っている。これは、政府への陳情活動が将来どのように思い起こされるか考えたときのことである。

「最初は、自分は社会運動などしていないと思っていました。
でも、署名活動をして厚生労働省や文部科学省、子どもに関する団体などの関係機関や google、yahoo!などに提出したところ、
その活動がメディアに放送され、（1960 年代の）学生運動と同じ文脈で語られました。そこで自分の活動が、世代の違う人たちから社会運動として見られる可能性があることに気づきました」

活動を支援する資金

日本のアクティビストは、資金を自主的に使用できる革新的な手段を用いており、大多数がクラウドファンディングを好んでいる。他国を含め、インタビューした 203 人のアクティビストの中で、他にクラウドファンディング利用に言及したのは、ベトナムのアクティビスト 1 人だけだった。Nanami は、主に他の学生からクラウドファンディングで多額の資金を集めることに成功していた。

「2022 年 10 月頃から始めて、今までに啓発用の動画を 60 本ほど作りました。動画を作って SNS で発信したり…。ただ、動画を作ろうと思ったら専門家に作ってもらわないといけないので、最初は自分でお金を出して作っていました。週に 2 本くらい動画を作ろうと思い始めたら、お金が足りなくなってしまって。それで、クラウドファンディングをやりました。500 万円集まって、今はそのお金で 100 本くらい動画を作ることを目標にしています」

クラウドファンディングを利用する前は、講義のための交通費を自身で賄わなければならなかった。Nanami はクラウドファンディングのメリットをこう語る。

「クラウドファンディングは、決められた目標金額を達成するためにみんなで協力する短期間の試みで、数字が常に更新されていきます。だから、見てみると(例えば)残りあと 30(万円)必要であることが分かります。だから、じゃあ、このプロジェクトを応援しよう。だから、あれも応援しようと思います。他の人のプロジェクトも応援したいですからね。いろんなクラブを応援しているから、そういう意味でもね。クラウドファンディングってすごいです。一種のお祭りのように捉えています」

SPES もクラウドファンディングを資金集めの効果的な方法として認識している。Lily は、クラウドファンディングのもう一つの利点として、他人の指図ではなく、自分が集中したいことにお金を使えることを挙げた。一方、R は活動の大半を無償で行っている。彼女は過去にクラウドファンディングを利用して、タピオカティーを使って生理用品の必要性を訴えたプロジェクトを行ったことがある。彼女はクラウドファンディングのもう一つの利点として、資金調達と並行してプロジェクトの宣伝ができることを挙げた。しかし R は、資金調達は継続的な課題であると述べた。

「クラウドファンディングは素晴らしいことだと思いますが、ジェンダーや性教育に関することでお金を集めるのは難しいです」

SPES もまた、無償活動に頼る比重が高く、お金の心配をせずに好きな活動ができればいいと話していた。

「対象世代である中学生や高校生にお金を使ってもらわずに
活動資金を調達するにはどうしたらいいか、いつも悩んでいます。
いろいろなファンドがあり、利用している人がいることは知っていますが、クラウドファンディングを利用したことがある人のほうが
多く知っているし、質問もしやすいです」

Lily は、以前にも国連の補助金で資金を得たことがあるが、その補助金は用途が柔軟であったと述べた。彼女は、特定の問題や活動に厳密に縛られない柔軟な助成金しか求めないとも語った。なぜなら使途が決まった助成金では、彼女自身が望むような方法でユースを代表することは難しいからだ。

「 お金は力を持つことができるので、そのような状況は避けたいのです」「クラウドファンディングは素晴らしいことだと思いますが、
ジェンダーや性教育に関することでお金を集めるのは難しいです」

Goma もまた、助成金が主な資金源だと語った。以前、障害者の性をテーマにした『ここからかるた』のために、新聞社からの寄付金を得ていた。

活動への障壁

インタビュー参加者は、概して、自身の活動に関連して、それほど困難な障壁や課題を経験したことはないと感じていた。しかし、参加者のうち 3 人は、学業に集中しなければならないというプレッシャー、学業や仕事と他の活動との両立の難しさ、これらのことに優先順位をつけることの難しさについて言及した。

Lily は、意思決定プロセスに参加する際、自身のスキルや知識に自信が持てないことを挙げた。彼女は、ユースが気軽に参加できるような環境を整える必要があると強調した。W7 に参加した当初は、知らない用語がたくさんあったが、助けを求めることができ、サポートしてくれる環境があったと語った。

「長年その分野で研究してきた専門家に比べれば、困難もあり、
確かに知識も少ないです。しかし、ユースとして高いレベルの議論に
参加することには大きな意味があると思います。
環境問題にしても、ジェンダーの問題にしても、長い目で見て対処して
いかなければなりません。だから、若いうちからそういう問題を考え、
取り組む機会が必要なのです。
意思決定のプロセスに関われば、物事に対する考え方だけでなく、
大人として次世代をどう受け入れていくかにも影響を及ぼします」

R は、メディアの誤報に嫌な思いをしたことを話してくれた。例えば、メディアは彼女のキャンペーンや活動を取り上げるよりも、彼女が「性に関する苦い経験」を持つ若いアクティビストであるといった個人的なことに焦点を当て、彼女はそれに失望した。SPES は、自分の活動を「時間の無駄だ」と批判された経験がある。また、R もネット上で彼女の活動について批判を受けたことがある。

参加者には、ジェンダーや年齢が、彼女たちの活動を難しくしているかどうかについても尋ねたが、大半が、ジェンダーと年齢の両方が、自身の活動を阻む要因になりうると感じていた。

Goma は、ひとたび母親や妻になった女の子や女性は、期待される規範から逸脱しないことを求められると感じている。そのため、キャリアや大学の学位、その他の活動を追求することが難しくなり得る。

「加えて、『あの人は小さな赤ちゃんがいるのに、育児以外の
ことをしている』といった周囲からの圧力もあるでしょう。
今は独身だから何でもできるけど、子どもができたら、
そういう状況にもなるでしょう」

SPES は、キャンペーンをする際、男子や男性の方が尊重されると感じていた。SPES は東京都知事選の投票券を持っている人にレストランでの割引を提供し、投票率を上げるキャンペーンに参加した。彼女はレストランに交渉に行ったが、彼女だけでは相手にされなかった。しかし、男性仲間がレストランに入ると話を聞いてくれた。結局、キャンペーンを成し遂げるために男性に仕事を任せることになった。自身の感情やエゴよりも、活動の目標が優先された感があった。

「もし私が 40 代、50 代の社会的地位のある男性だったら、
私の意見はもっと尊重されたでしょう。
ユース女性というレッテルを貼られているような気がします」

女の子やユース女性のなかには、自分たちが受けた批判について述べた者もいた。

「批判を受けたとき、そのうちのいくつかは私の外見についてでした。
もし私が男だったら、こんなに批判されなかったかもしれません」

Lily も、女の子や女性は自身を守ることが難しいため、ハラスメントやセクシュアル・ハラスメントの可能性があると感じている。SPES（24 歳）もまた、ジェンダーや年齢の偏りとともに、一般的に特権的な背景を持つ人々が物事を決定していて、意思決定の場には十分な多様性がないと指摘した。

また、年齢が障壁になっているアクティビストもいた。Nanami は、学校で講演する際の謝礼金が年齢や肩書きで判断され、大人よりはるかに少ないことを挙げた。Lily もまた、ユースが搾取されかねない危険性を感じていた。例えば、大人にノーと言えないことである。

「年齢的に、私たちは社会で安定した地位を確立していません。
私を含め、学生のほとんどは経済的に完全に自立しているわけではなく、経験も浅く、緊急時や問題が起きたときにどうすればいいかという知識も乏しいです。
こうしたことが、ユースとして活躍することを難しくしているのでしょう」

Nanami は、否定的な意見に対処するために、疲れたら休息をとり、自身を大切にすることが重要だと語った。何人かのアクティビストは、ユース・クラブや協議会、グループなどの助けにより、活動が継続できていると答えた。

持続可能な開発目標（SDGs）

ユース女性アクティビストは SDGs に精通しており、日本では SDGs に関連したユースの参加イベントや活動が数多くあるようだった。Lily は、SDGs が扱う問題は多岐にわたるため、すべてを知っているわけではないが、17 の目標があること、MDGs（ミレニアム開発目標）の後継であること、各国がどのような行動をとるのか、といった重要な点は理解していると述べた。しかし、各目標の達成度や NGO やユースが果たす役割については、まだ勉強中だという。

Goma は、SDGs が誰一人取り残さないことに関連し、17 の目標があることを知っていた。彼女は SDG5（ジェンダー平等）の重要性を知っており、マララ・ユスフザイが教育とジェンダーについて Instagram に投稿していることを思い出した。

「今通っている大学院は SDGs をとても重視しています。
SDGs のどの目標に対応した授業なのか示されるのです。
最近は SDGs とリーダーシップという授業を受けています」

SPES も SDGs についてよく知っていた。彼女は大学生のとき、「SDGs Campus」という団体のメンバーとして SDGs について学んだ。この団体の目的は、学内で SDGs の目標を達成することだった。例えば、食料安全保障に関するキャンペーンを行い、意識を高めさせた。R（22 歳）は以前、SDGs に関するユースサークルに所属しており、ジェンダーやフェムテックに関連したことを話し合っていたという。

Nanami は主に気候変動の観点から SDGs に取り組んだ。彼女は、以前住んでいたインドネシアでは SDGs についてあまり語られていなかったので、SDGs について学ぶために日本に戻ったと語った。

一方、R は SDGs を活動に利用しないと断言した。彼女はまた、SDGs という言葉が独り歩きして、企業は企業の社会的責任を果たしているように見せかけるために SDGs を利用する傾向があると述べた。

「私は SDGs と自分の活動をリンクさせていないのですが、
友人からはリンクさせたほうがいいと言われます。
でも、日本では SDGs がビジネス目的にしか使われていないような
気がして、SDGs にあまりいい印象を持っていません。
企業は社会に与える悪影響にしっかり対応するのではなく、
SDGs を活用することで見栄えよくしているような気がします。
社会をより良くすることを目指すのではなく、
企業が利益を上げるために利用されているように思います」

Nanami もまた、SDGs に関係なく自分の活動は続くと考えていたが、共通の目標には利点があると認めていた。

「SDGs があってもなくても、私は活動すると思います。
ただ、世界で初めて共通の目標ができたのはいいことです。
共通の目標があった方が取り組みやすいと思いますが、
SDGs にはあまりこだわっていません」

Nanami は、SDGs を活動で利用していないにもかかわらず、SDGs と彼女がすでに取り組んでいる環境に関する活動には明確な関係やリンクがあることを認めていた。その意味で、彼女の活動はすべて SDGs に関連していた。教育の観点から見ると、彼女は SDGs が日本で「ブーム」になっており、学校では SDGs を教科として取り上げていると考えていた。

未来の活動

インタビュー参加者は、少なくともある程度は活動を続けたいと答えた。例えば、アクティビストやキャンペーン実行者にはならなかったとしても、社会的影響を生み出せるようなキャリアを望んでいた。

SPES は、今後も活動を続けていくつもりだ。

「これから、想像もしていなかった世界規模の問題が起こるでしょう。
できる限り活動を続けていきたいです」

Nanami は、誰もが環境アクティビストであるような社会を作りたいと考え、講演やメディア、環境に優しい化粧品の開発などを通じて環境保護活動を続けたいと考えている。

また、活動から離れた他の専門分野への転身を希望する人もいたが、それらの分野が世界に変化を起こすことと密接に結びついていることを望んでいた。Lily は、国際問題や国際協力の分野への転身を希望しており、今やっている活動は、たとえ直接リンクしていなくても役に立つと感じていた。Goma は、包括的性教育を教える助産師になりたいという。

R は、理想的な世界では活動は必要ないだろうが、それはあり得ないと言った。そのため、彼女はいくつかの活動を続けたいと考えていた。

「うるさい人間にはなりたくないけれど、情熱は持ち続けたいです。
活動はしなくても、活動やキャンペーンには積極的に肯定的でありたいです。
何か活動を続けていけたらいいなと思います」

求められる支援

インタビュー参加者のほとんどが、経済的支援を求めていた。参加者のうち 3 人は、ボランティア活動に対する補償や、NGO が自分たちのイベントを支援してくれることを望んでいると答えた。Lily は特に、ユースの活動立ち上げのための資金調達の方法が増えてほしいと望んでいた。また、R も資金調達への支援を望んでいた。

「ビジネスコンテストやハッカソンイベントに
資金を提供する財団はたくさんありますが、
社会アクティビストを支援する財団は皆無です。
ビジネスコンテストの社会アクティビスト版みたいなものも
あり得ますが、人々が何を主張するかは審査員の意見
に左右されることになるでしょう。
学生と一緒にプロジェクトを開催することができれば、
国際的に認知された組織であるため、そのプロジェクトに
信用と権威を与えることができます。
そのようなイベントのスポンサーになるだけでも、
社会から信頼をされます。
NGO が学生たちに目標達成のための
アドバイスを与えることができればもっといいでしょう、
それはアクティビストにとってありがたいことだと思います」

Goma は、ユースたちが活動に参加するための支援をもっと受けるべきと考えており、ユースの大半はキャンペーンに参加する方法や組織に参加する方法を知らないことを強調した。彼女はまた、知識を深めるために組織ができることを共有した。

「知識不足を解消するために、プランのような団体が学校を訪問し、
その活動について授業をすることができるでしょう。
団体や活動に参加するためには、少なくとも高校生である必要があると
思うので、主な対象は高校生であるべきでしょうが、小学生にもこのような
機会を設けて、団体について知ってもらうことができればいいと思います。
経験不足の問題を解決するために、プランが 1 日就業プログラムを提供し、
学生をプランのスタッフとして働かせることができれば面白いでしょう」

R はまた、政治家への働きかけ方についてもっと支援が欲しいと述べた。SPES はさらに、活動計画の立て方についてもっとサポートが欲しいと述べた。Lily は、例えば学校の授業時間外のユースがもっと参加しやすい時間帯に、ユース向けのイベント開催や活動実施をしてほしいと述べた。Lily はまた、NGO と良好な関係を築く機会を求めていた。

「プランが、ユースが一緒に仕事をしたり、団体と協力したりすること
ができるようなプロジェクトを提供してくれたらうれしいですね」

提言

あらゆる意思決定の場において、政策決定者が女の子とユース女性による協働を支援し、彼女たちの市民社会アクターとしての価値と役割を認識することが重要である。これを達成するため、以下の 5 つが鍵になる。

1. 草の根活動をする女の子やユースグループ、ネットワークに対する柔軟で多様な資金提供の量を増やす。
2. 思春期の女の子とユース女性による、市民的活動と政治的活動を促す。このためには、草の根活動をする女の子やユースグループに主導権を与え、オープンで安全な市民社会を通じて政策決定者へのアクセスを提供することが必要である。
3. 女の子やユース女性の活動に対する障壁や、家庭、国家、国際レベルで政治的に活動する人々に対する強い反権利運動とジェンダー差別の拡大を背景にした反発の高まりに対処する。
4. コミュニケーション能力を向上させ、リーダーシップの可能性を高めるために必要なソフトスキルの開発を含め、あらゆるレベルで女の子とユース女性の教育を支援する。
5. SDGsを再認識させるため、また、SDGsサミットにおける2030アジェンダの分野横断的な優先事項としてのジェンダー平等の実現に向け、加盟国の間で政治的意志、投資、積極的な関与を高めていく。

行動への呼びかけ [2]

1. 資金的援助とその他のサポートを提供する。

政府ドナー、慈善家、資金提供団体、市民社会組織は
• 女の子やユース主導のグループ、団体、ネットワークに対し、その活動を支援するための柔軟で即応性のある資金提供を増やすこと。これには、発足時のシードとなる資金や他の種類の柔軟な資金を組み合わせること、小額の助成金や彼らの優先事項や活動状況に対応した長期的な資金を提供することが含まれる。
• 経済的な支援以外でも、女の子たちのニーズに沿った支援を提供する。
• リスク選好を再評価し、ユースへの権限と信頼を高める。これには、女の子のアクティビストやユース女性グループが資金やその他の支援を利用することを妨げる官僚的な障壁を取り除くことが含まれる。
• 女の子と共同設計した、より包摂的で参加型の助成金決定プロセスを通じて財源を提供する。
• 公正かつ適切な報酬を提供する。女の子やユースと活動する団体は、彼女らの時間と専門知識に対して報酬を支払う必要がある。

2. 公共生活のあらゆる分野における女の子とユース女性の意義ある参画を促進し、政策決定者へのアクセスを容易にする。

政府は
• 女の子主導のグループやユースグループの結社・集会の自由、情報へアクセスする権利、プライバシーの権利、意見を聞いてもらう権利を制限する制度的障壁を取り除く。
• 国の法律と政策によって、女の子とユース女性が、その活動や資金調達の選択肢に影響されることなく、活動や団体の中で組織化し、法的に登録するかしないかを選択できるようにする。
• 地方自治体と協力し、女の子とユースが主導するグループが、市民社会のメンバーとして尊重され、政策に関する議論と意思決定に参加できるために必要な場と資源を提供する。
• 多様な背景のある女の子とユース女性のアクティビストが、彼女らの生活に関することに、積極的に貢献できるようにするため、国内法および政策を採択し、予算を組み、実施し、監視する。

[2] なお、これは行動喚起の要約であり、詳細については世界ガールズ・レポート 2023 の報告書を参照のこと: Turning the Word Around: Girl and Young Women Activists leading the fight for equality - Technical Report. Available at: https://plan-international.org/publications/turning-world-around

政府、地方自治体、国の省庁は

- 国が運営するユース協議会や子ども・ユース議会など、正式な会議体へ女の子とユースの参加を可能にする既存の枠組みを増やし、強化し、そのために必要な資源を十分に提供する。

国連、各国政府、そして国際社会は

- 女の子とユース女性がグローバルな開発アジェンダと枠組みの形成、実施、監視へ意義ある参画をするために取り組む。

3. 女の子やユース女性の活動に対する障壁や、政治的に活動的な人々に対する反発の高まりに対処する。

政府は

- 社会規範の変革キャンペーン、法律と政策の強化、通報システムの強化を通じて、女の子とユース女性アクティビストが、オンラインでも公共の場でも、脅迫、嫌がらせ、暴力を恐れずに発言できるようにする。

政府の政策立案者とソーシャルメディア企業は

- 女の子やユース女性アクティビストのために、オープンでアクセスしやすく、安全なオンライン上の市民スペースを作り、意義ある接続とインターネットへのアクセスを保障する責任を負う。

国内、地域、国際人権機関および政府は

- 女の子やユース女性人権擁護アクティビストが置かれている状況を把握し、彼女たちを保護し、力を与えるための適切な措置をとる。

政府、ドナー、NGO、ジェンダー正義に向けた運動は

- 最前線で提言活動をしている女の子主導のグループのウェルビーイングと安全を確保するために資源を提供し、支援する。女の子たちは、構造的な暴力や差別に立ち向かう際、自分たちの心理社会的健康を保つ場を必要としている。

国連機関、パートナーシップ、INGO を含む国際機関は

- コミュニティで声を挙げ、提言活動することを選択した女の子やユース女性に、早期の機会と持続的な支援を提供するメンタリング（人材育成方法）を含む長期的プログラムに投資し、支援する。

4. あらゆるレベルで女の子とユース女性の教育を支援する

教育省は
• 人権教育とシチズンシップ教育に焦点を当てた、包摂的で質の高いジェンダー・トランスフォーマティブ教育の提供を確保する。すべての子どもとユース、特に女の子とユース女性に、アクティビスト、擁護者、知識ある市民として、市民的活動と政治的活動に自信を持って参加するために必要なスキル、知識、批判的意識、経験を身につけさせる。

学校の関係者（教員、協議会、保護者）は
• 生徒、特に女の子に、学校評議会（生徒会）や選挙など学校の枠組みの中で、リーダーシップに関するスキル、人前で話すこと、意思決定プロセスへの参加など、影響力を発揮するために不可欠なソフトスキルを身につける機会を提供する。

国際 NGO と市民社会は
• 変化をもたらすための女の子やユースアクティビストの価値を認識する。効果的な提言活動の組み立て方、政策決定者への働きかけ方、政策の見極め方、意思決定プロセスへ影響の与え方といった、提言活動にとって重要なスキルの開発を支援する。リーダーシップや人前で話すことなどのソフトスキルの向上に重点を置く。

5. 国連加盟国は、SDGs サミットにおける 2030 アジェンダの分野横断的な優先事項として、また SDGs を再度思い出させるものとして、政治的意志、投資を高め、注力してジェンダー平等を目指さねばならない

各国政府は
• SDGs の枠組みの中でジェンダー平等と女の子の権利を支援する。加盟国に対し、SDGs サミットで確固たる意思表明を行い、すべての SDGs においてジェンダー平等と思春期の女の子のための活動への投資するよう世界的・国内的にも力強い誓いを立てることを求める。
• SDGs の進捗状況を適切に把握するために、ジェンダーや年齢を細分化したデータに投資する。